

胃がん

【集学的治療の実施状況】

消化器内科：

消化器内科、外科、放射線科、病理診断科、緩和ケアチーム、外来化学療法室が協力し、集学的治療を行っています。

各種画像検査により深達度、リンパ節転移、遠隔転移を診断し、進行度を分類し、生検組織により病理診断を行います。これらの結果から、胃癌治療ガイドラインに基づいて治療法を決定します。早期胃癌で内視鏡治療の適応となる症例に対しては、ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）を行います。手術治療の適応となるものは外科へ手術依頼します。また手術適応のない症例や、手術後の追加治療として化学療法を行います。

外科・消化器外科：

外科、消化器科、麻酔科、病理診断科、放射線科、化学療法室、緩和ケアチーム、NST チームが協力して、集学的治療を行います。

手術：早期がんには希望により腹腔鏡下手術も行っています。進行度を考慮して手術術式を決定しています。

化学療法：外来化学療法室を整備し、外来での化学療法を可能にしています。

放射線科：

画像診断と放射線治療を行います。

栄養サポートチーム（NST）：

医師、栄養士、看護師、薬剤師等が一丸となって栄養面をサポートしています。具体的にはがんによって食事が摂れなくなった患者さんに適切な栄養について検討しています。週一回の回診とカンファレンスを行っています。

緩和ケアチーム：

緩和ケアチーム、麻酔科、心療内科、各診療科、NST チームが協力して集学的治療を行っています。

緩和ケアチーム(医師、認定看護師、認定薬剤師等)が中心になって、病状、患者の思いを把握して、多職種で連携して苦痛を緩和します。

《準じているガイドライン名》

胃癌治療ガイドライン 2010 年版（日本胃癌学会）

がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン 2014 年版（日本緩和医療学会）

苦痛緩和のための鎮静に関するガイドライン 2010 年版 (日本緩和医療学会)
終末期癌患者に対する輸液療法のガイドライン 2013 年版 (日本緩和医療学会)
がん患者の消化器症状の緩和に関するガイドライン 2011 年版 (日本緩和医療学会)
がん患者の呼吸症状の緩和に関するガイドライン 2011 年版 (日本緩和医療学会)
がん性痛に対するインターベンショナル治療ガイドライン (日本ペインクリニック学会)
神経障害性疼痛薬物療法ガイドライン (日本ペインクリニック学会)
在宅緩和ケアガイドブック 2008 年版 (日本緩和医療学会)